イヴ・ストロークにすら飢えている子どもがいることを、頭の隅に置いておくこともまた必要である。

しかし、「わざと」行う行為がそのいずれであるかは、担任であればしっかり弁別できるようでありたいものである。

学級のきまりはみんなの約束

仮に教師の気を惹くという理由だけであれば、もっといろいろなことをしてくるはずである。それが、「わざときまりを守らない」という言動で表現されるのであれば、格好の教育場面という見方もできる。

これまでの論考で明らかなことは、「怒られるのを承知で、わざときまりを守らない」という行為は背後には、おしなべて周囲との良好な関係を築けないという理由がある。

親からの離脱を画策するその視線は、たいてい周囲の仲間に向かう。その仲間もまた、それぞれに悪戦苦闘していていろいろなトラブルが発生する。とすれば、必然的に最も安心できる教師との関係に視線は集中する。この先生は、どこまで認めてくれるか。何をすれば怒るか。子どもたちは、きっとそれを確かめているのだろう。

そのことによって、教師と仲間と自分によって構成される学級という空間を、自分のものにしたいのだ。

とすれば、基準を明確に示して、毅然とした態度でルール違反を指摘するのも一方法である。しかし、それではいかにも策がなさ過ぎる。

「みんなで考えよう」と誘い込み、他の子どもたちといっしょの話し合いの場をつくってやればいい。ルール違反が、周囲の仲間にどのような迷惑をかけたか。自分がそうされたら、どんな気持ちになるか。

子どもに囲まれた「ガリバー」は、「自分がルール」になってはいけない。ルールの教育は、「みんなで決めてみんなで守る」ことが鉄則である。関係不全を理由にいろいろしかけてくるやんちゃな子は、ルール違反を契機にして仲間の輪に誘い込んでやればいい。それが、教育のプロとしての教師の技である。

この時期の保護者に

子どもの遊びを大切にする

——遊びの条件の再構築

静岡大学教授　馬居政幸（うまい まさゆき）

三つの役割

「よく遊び、よく学べ」という諺がある。「子どもは遊びの天才」ともいわれる。子どもの成長にとって〝遊び〟の世界が重要な役割を持つことを示唆する言葉である。だが本当は、学校（教師）も家庭（保護者）も、「よく学べ」の方が大事ではないか。とりわけ、小学校も三、四年になれば、分数を代表に抽象的な概念の理解や操作が授業の課題になり、遊びは勉強疲れを癒す休み時間の役割に限られる。保護者にとっても、家庭学習だけでは不安で、塾に通わせるかどうかが悩みの種になり、「遊んでばかりでなくて、少しは勉強しなさい」が口癖になる時期。「よく遊び」は低学年以下のこと、中学年になれば「よく学べ」の方に重心を、と考える親や教師は少なくないはず。だが考えてほしい。子どもの成長の証は一人の人間としての自立であり、その準備として、学校の勉強では身につけられない次の三つの力が〝遊び〟に秘められていることを。

一つは総合性。子どもは遊ぶために自分が持つ力のすべてを出そうとする。遊びは、子どもが身につけてきた多様な能力を総合して実践的に試す場である。

二つは創造（想像）性。子どもは遊ぶために必要であれば、なんとか工夫して手に入れ、遊びを妨げる問題には、必死に努力して解決しようとする。遊びは、子どもが新たな力を夢見て生み出す場であり、個性や

能力を生かして独自の文化を創造（想像）する場である。

三つは楽しさ。これはあえて説明するまでもないであろう。楽しさこそ、子どもたちの主体性や能動性を育む源であり、様々な時と場で出会う〝ヒト、モノ、コト〟に、個性豊かにコミュニケートできる〝知〟と〝情〟と〝心〟を培うための基礎基本である。

逆に、刻苦勉励や勤勉という言葉が象徴するように、学校の授業は強いて勉める世界。事前に決められ（創造的ではない）、教科に分けられた（総合的でない）知識を、主体性や個性と関わりなく（楽しくない）、教えら（強制さ）れる。このような学習の必要性は認めるが、それだけならロボットと同じ。楽しく遊ぶことこそ人間固有の能力。改めて遊びを子どもの日常生活の中に積極的に取り入れる必要性を確認する。だが事態は深刻。遊びの土台・条件が崩れつつある。三つの間（時間、空間、仲間）の喪失を問題視する所以である。

遊びの土台（条件）の再構築

本年度の小学三、四年生は二〇〇〇年代前半生まれ。三〇歳前後で産んだ子なら、四〇歳前後に人口の山を形成する七〇年代前半生まれの団塊ジュニアが親の世代。図1の児童（一八歳以下）のいる世帯の割合は、親世代誕生期の一九七五年は五三％だが、子世代誕生期の二〇〇一年は二八・七％、二〇〇四年は二七・九％と半減した。また図2から、親世代が小学生であった八〇年代前半は専業主婦全盛期だが、現在は共働き世帯が多数派に逆転。

半数以上の家庭に子どもがいて、既婚女性の多くが専業主婦なら、学校から帰って遊ぶ友、少し怖いがあこがれの先輩、口うるさいおばさんはどこにでもいた。だが子どものいる家庭が半減し、女性の大多数が職場にいれば、三時までに学校が終わり、家の近くに広場があっても、遊ぶ相手、モデルとなる先輩、見守る大人はいない。遊びの復権には、仲間、先輩、支える人とセットになった時と場の再構築が必須条件。手がかりはある。表1（八二頁）をみてほしい。室内遊びと外遊びの一覧から、元気に遊ぶ子どもの姿が想像できよう。静岡市内の小学校内に設置された児童クラブで発行する「家庭へのたより」に掲載されたものである。

児童福祉法には保育園に入れる子どもの条件を「保育に欠ける」と記す。その子たちが小学校に入れば、

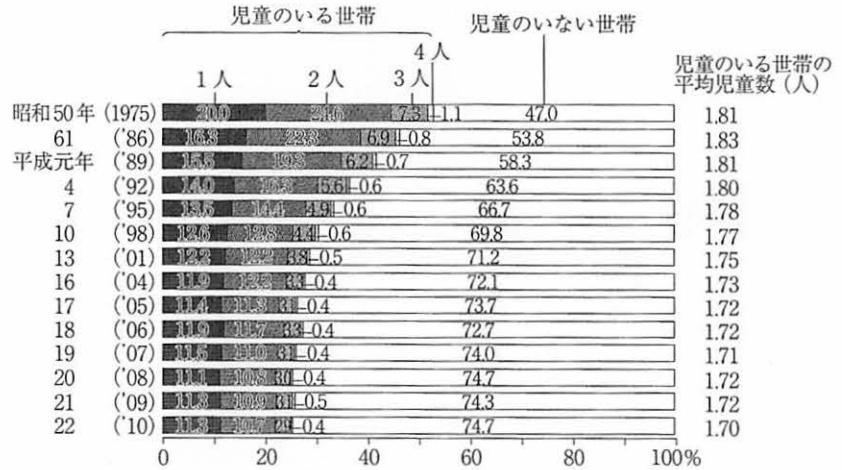

図1　児童の有無及び児童数別にみた世帯数の構成割合・平均児童数の年次推移
（厚生労働省大臣官房統計情報部『グラフでみる世帯の状況　平成24年　国民生活基礎調査（平成22年）の結果から』2012，14頁）

かぎっ子対策のための学童保育が施策課題になった。いずれも、母親が働く子は福祉の対象（不幸な子）とみなすことが、法と制度の前提。共働き世帯が多数派に転換して以後の家族の現実とのズレは大きい。

他方、現在、静岡市の五歳児の四割以上が保育園に通い、ほぼすべての小学校に放課後児童クラブが併設される。共働きの保護者の増加を見据えての施策。今を生きる子どもと親を支える仕組みに変化が見える。

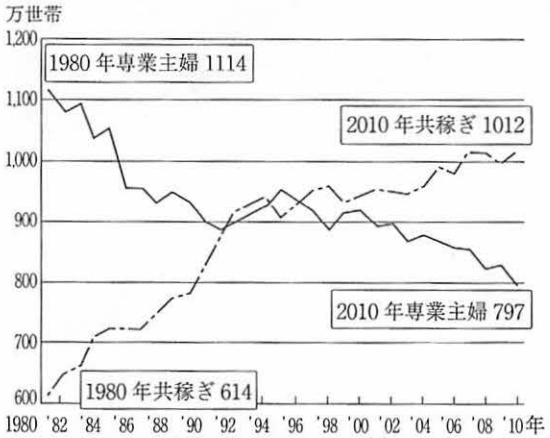

図2　専業主婦世帯と共働き世帯の推移
（厚生労働省『平成23年版厚生労働白書』2011，13頁）

表１　放課後児童クラブにおける子どもの遊びの姿

室内遊び
タワーボール，ツイスター，ドキドキピザや恐竜カード，マンカラ，ドラホッケーなど，１年生にとっては目新しいおもちゃも多いようです。いろいろ出してきては遊んでいます。２年生以上はトランプの〝お金〟がちょっとブームだったり，ドミノや将棋もよくやっています。工作が好きな子も多く，廃材があっという間に船になったり，武器になったり，いろいろ作られています。

外遊び
男の子はサッカー人気が高いです。１年生は保育園にはなかったブランコや一輪車が人気。そして，この時期恒例，ダンゴむし探しがやっぱり始まっています。２年生もGW明けにはNグランドOKが学年全体で出る予定で，楽しみにしている子もたくさんいます。

その兆しを、「工作が好きな子も多く、廃材があっという間に船になったり、武器になったり……この時期恒例、ダンゴむし探しがやっぱり始まって……グランドOK……楽しみにしている子もたくさん」と保護者に伝える指導員の眼差しに見出せる。

静岡市の児童クラブ入会条件は保育園と同じだが、横浜市の放課後キッズクラブは、希望すれば学年を問わず誰もが対象。静岡市でも児童クラブ入会条件の拡大を願う市民は少なくない。遊びを大人が準備することに疑問の声もある。かつて私もその一人であった。だが三つの間に加えて、先輩と見守る大人が失われたことを知ったとき、処方箋を変えざるをえなかった。

遊びと学びは車の両輪だが、メダルの表と裏ともみなせる。両輪は異なる二つの力のバランスが課題だが、表裏は同じ事象の二つの側面。遊びの時と場に学びを見出し、学びの時と場に遊びを取り込む。両輪として回転する遊びと学びのいずれにも、遊びを学びに、学びを遊びに転換させるキーパーソンこそ、モデルとなる身近な年上の先輩と絶妙のタイミングで口と手をだす大人の男女。この条件を満たす身近な時と場を問えば、自ずと答えは出てこよう。様々なスポーツクラブや習い事も、さらには学習塾さえも、仲間に加えて、信頼できる先輩と見守ってくれる人に出会えば、遊びの三つの力を獲得する場に転換可能である。

そして、この総合性、創造力、楽しさ（主体性）こそ、育成が求められる〝総合的な「知」〟、すなわち「自ら課題を見つけて考える力や柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して課題を解決する力や他者との関係を築く力」（平成二二年度教育白書）の基盤である。これが先に遊びなくして自立なしとした理由である。

この時期の保護者に

本当に必要な学習習慣とは何か

――「勉強しなさい！」からの脱却

跡見学園女子大学教授　藤澤伸介（ふじさわしんすけ）

「学習習慣」という言葉を聞くと、「毎日一定の時間、机の前に座って教材を広げ、黙々と作業をすること」という意味だと思う親が多い。そして、そういう解釈を当てこんだ教材も出版されていて、各ページの記入箇所を順に埋めていくと、何かしらの練習ができるようになっている。ところが、これをやらせようとしても、わが子はそう簡単にはやってくれない。叱ったりなだめすかしたりすれば、何日かはやるかもしれないが、継続させるのは至難の技である。結局は「どうしたらよいのでしょう！」と悲嘆に暮れ、「学習習慣の形成は、親には無理です」という結論になりやすい。しかしながら、こんな習慣に果たしてどれだけの意味があるのか、考えてみたことはあるだろうか。

学習習慣とは何か

「生涯学習」という言葉がある。人が生涯を通じて主体的に学習活動を行う存在だという点に注目して使われる語だ。日々の生活を快適にしたり、仕事をうまくこなしたり、余暇時間を有意義に過ごしたりするためには、沢山の知識や技能が身についている必要がある。しかし、学校教育ですべての人に必要な知識や技能をすべて教育するなどということは不可能だし、時代とともに必要な知識や技能は変化するので、結局は「自ら学ぶ」という行動様式を、どの人も身につけておかなくてはならない。

CONTENTS

児童心理 臨時増刊 2012 8月号

小学三年生・四年生のこころと世界

001 渡辺弥生 小学三・四年生ってどんな時期？——心理的な発達の姿と支援の必要性

011 石川信一 「友だちともっと遊びたい」——社会的スキルを伸ばす

018 古城和敬 中学年のグループ活動と指導のあり方

024 森　徹 「みんなよりできる・みんなよりできない」——得意・不得意を意識する

030 山崎洋史 「Aさんは、B君のことが好きだって！」——男女の意識、羞恥心の芽生え

036 上岡　学 クラブ活動が待ち遠しい子どもたち——待ち遠しいクラブ活動にするための条件

学校生活を楽しむ子どもたち

043 明石要一 今の子どもたちの「ギャング・エイジ」——小学校三、四年生が危ない

049 細田憲一 「九歳・一〇歳の壁」を考える

055 岡野由紀枝 友だちを選ぶようになる——「先生、Aちゃんと一緒に遊びたい」

059 三島浩路 自己主張ができるようになる

063 田村　学 少しずつ抽象的な思考ができる

067 梅澤　実 国語の授業がわからない——説明文を物語文として読む子

071 真如昌美 勝敗にこだわる——トラブルは成長の通過点

075 上杉賢士 わざと〈きまり〉を守らない——先生に怒られたっていいよ

学級・学校生活のエピソード

079 馬居政幸 子どもの遊びを大切にする——遊びの条件の再構築

083 藤澤伸介 本当に必要な学習習慣とは何か——「勉強しなさい！」からの脱却

087 藤枝静暁 学校での〈自慢話〉に耳を傾ける——わが子の活躍を認め励ます

092 西本由美 もし塾に行かせるなら——子どもの発達に配慮して

この時期の保護者に